



# Red Hat Insights 2023

## Red Hat Insights 修復ガイド

修復 Playbook を使用した RHEL システムの問題の修正



修復 Playbook を使用した RHEL システムの問題の修正

## 法律上の通知

Copyright © 2023 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux<sup>®</sup> is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java<sup>®</sup> is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS<sup>®</sup> is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL<sup>®</sup> is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js<sup>®</sup> is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack<sup>®</sup> Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

## 概要

Playbook を作成して実行し、Insights に登録されたシステムの問題を修正します。Red Hat では、コード、ドキュメント、Web プロパティにおける配慮に欠ける用語の置き換えに取り組んでいます。まずは、マスター (master)、スレーブ (slave)、ブラックリスト (blacklist)、ホワイトリスト (whitelist) の 4 つの用語の置き換えから始めます。この取り組みは膨大な作業を要するため、今後の複数のリリースで段階的に用語の置き換えを実施して参ります。詳細は、Red Hat CTO である Chris Wright のメッセージをご覧ください。

---

## 目次

<b>第1章 修復の概要</b> .....	<b>3</b>
1.1. ユーザーアクセスに関する考慮事項	3
<b>第2章 INSIGHTS との通信の有効化</b> .....	<b>5</b>
2.1. RHC クライアントの有効化	5
2.2. RED HAT INSIGHTS と通信するための SATELLITE CLOUD CONNECTOR の設定	5
<b>第3章 INSIGHTS での修復 PLAYBOOK の作成と管理</b> .....	<b>11</b>
3.1. RHEL システムの CVE 脆弱性を修正する PLAYBOOK の作成	11
3.2. INSIGHTS FOR RED HAT ENTERPRISE LINUX での修復 PLAYBOOK の管理	12
<b>第4章 修復 PLAYBOOK の実行</b> .....	<b>14</b>
4.1. INSIGHTS FOR RED HAT ENTERPRISE LINUX からの 修復 PLAYBOOK の実行	14
<b>RED HAT ドキュメントへのフィードバック (英語のみ)</b> .....	<b>15</b>



# 第1章 修復の概要

Red Hat Enterprise Linux (RHEL) インフラストラクチャーで最も高い修正優先度を特定したら、修正 Playbook を作成して実行し、それらの問題を修正できます。

## サブスクリプションの要件

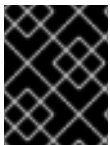
- Red Hat Enterprise Linux 用の Red Hat Insights は、すべての RHEL サブスクリプションに含まれています。追加のサブスクリプションは必要ありません。

## ユーザー要件

- 修復機能には、Red Hat Hybrid Cloud Console (Hybrid Cloud Console) の Insights for Red Hat Enterprise Linux アプリケーションでアクセスできます。
- Red Hat Satellite で管理されるシステムには、Satellite アプリケーション UI からアクセスできます。
- Insights のすべてのユーザーは、修復 Playbook の読み取り、作成、および管理に自動的にアクセスできます。
- リモートシステムで Playbook を実行するには、Hybrid Cloud Console の ID とアクセス管理設定で組織管理者によって付与された、**Remediations administrator** の事前定義されたユーザーアクセスロールが必要です。

## 1.1. ユーザーアクセスに関する考慮事項

Red Hat Enterprise Linux 機能の Red Hat Insights へのアクセスは、アカウントの組織管理者がユーザーアクセスで設定した設定によって制御されます。アカウントのすべてのユーザーは、Insights for Red Hat Enterprise Linux のほとんどのデータにアクセスできます。ただし、ユーザーに昇格されたアクセス権が必要なアクションがいくつかあります。

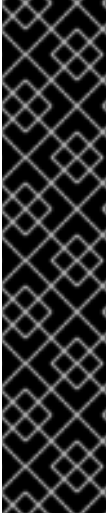


### 重要

このドキュメントでは、手順の前提条件で、手順を実行するために昇格したアクセス権が必要かどうかを宣言しています。

次の事前定義されたロールは、アクセスに特に関連しています。

- **デフォルトのアクセスグループ。** アカウントのすべての人は、デフォルトアクセスグループのメンバーです。Default アクセスグループのメンバーとして、すでに Insights for Red Hat Enterprise Linux のほとんどの情報を表示できます。
- **組織管理者。** アカウントの組織管理者は、ユーザーアクセスグループを作成および変更し、他のアカウントユーザーにアクセス権を付与できます。画面の右上にある Red Hat Hybrid Cloud Console のヘッダーで自分の名前をクリックすると、自分が組織管理者であるかどうかを確認できます。管理者は、ユーザー名のすぐ下にあります。



## 重要

拡張アクセスのリクエスト 必要だと思われる機能を利用できない場合、以下のことが必要な場合があります。

- 組織管理者の詳細については、[カスタマーサービス](#) にお問い合わせください。
  - リクエストを送信する際に、アカウント番号を提供してください。
- その個人に連絡してアクセスを依頼し、次の情報を提供します。
  - アクセスする必要があるロールの名前。例: Remediations administrator
  - 組織管理者にアクセスを提供する方法を知らせるのに役立つ、完全な [ユーザーアクセスドキュメント](#) へのリンク。

### 1.1.1. 修復ユーザーのユーザーアクセスロール

以下のロールは、Red Hat Enterprise Linux の Insights の修復機能への標準または拡張アクセスを有効にします。

- **Remediations viewer**。Remediations viewer ロールは、デフォルトのアクセスグループに含まれています。Remediations viewer ロールは、アカウントの既存の Playbook を表示し、新しい Playbook を作成するためのアクセスを許可します。Remediations viewer は、システムで Playbook を実行できません。
- **Remediations administrator**。Remediations administrator は、システム上で Playbook をリモートで実行することを含む、すべての修復機能へのアクセスを許可します。



## 第2章 INSIGHTS との通信の有効化

Red Hat Enterprise Linux の Red Hat Insights からリモートシステムで Playbook を実行するには、システムが Red Hat Insights と通信できる必要があります。

- **Red Hat Satellite で管理されていない** Red Hat Enterprise Linux システムの場合、以下の手順に従って、それらのシステムで `rhc` クライアントを有効にする必要があります。
- サテライトによって管理されるシステムの場合、それらのシステムのホストサーバーで `Cloud Connector` を設定します。

### 2.1. RHC クライアントの有効化

Insights for Red Hat Enterprise Linux から修復 Playbook を実行できるようにするには、インフラストラクチャー内のシステムで `rhc` クライアントを有効にする必要があります。`rhc connect` コマンドは、システム (RHEL8.6 以降、および 9.0 以降) を Red Hat Subscription Manager および Red Hat Insights に登録し、Insights for Red Hat Enterprise Linux でリモートホスト設定 (`rhc`) 機能を有効にすることでこれを行います。

#### 前提条件

- RHEL ホストシステムでの `sudo` アクセス

#### RHEL8.5 システムで `rhc` を接続する

RHEL 8.5 のリモートホスト設定には、`ansible` と `rhc-playbook-worker` の依存関係があります。依存関係をインストールするには、最初に Subscription Manager に登録する必要があります。

- RHEL 8.5 システムで `rhc` を有効にします。

```
[root]# subscription-manager repos --enable ansible-2.9-for-rhel-8-x86_64-rpms
[root]# dnf -y install ansible rhc-worker-playbook-0.1.5-3.el8_4
[root]# rhc connect
```

#### RHEL8.6 および 9.0 以降のシステムで `rhc` を接続する

- RHEL8.6 以降、および RHEL9.0 以降のシステムで `rhc` を有効にします。

```
[root]# rhc connect
```

#### 関連情報

- `rhc` を有効にすると、[Red Hat Hybrid Cloud Console > Settings > Remote Host Configuration > Manage configuration](#) で設定を管理できます。
- `rhc` の完全なドキュメントについては、[リモートホストの設定と管理](#) を参照してください。

### 2.2. RED HAT INSIGHTS と通信するための SATELLITE CLOUD CONNECTOR の設定

Satellite インフラストラクチャーの問題を修正する前に、ホストを Insights for Red Hat Enterprise Linux に接続し、Satellite Server で `Cloud Connector` を設定する必要があります。



## 重要

ホスト修復を完全にサテライトから管理および実行する場合は、Cloud Connector を有効にする必要はありません。Cloud Connector を使用すると、Red Hat Enterprise Linux の Insights から、Satellite で管理されているホストを **リモート** で修正できます。

次の前提条件は、Satellite 設定の包括的なものです。

### 前提条件

- Satellite は、バージョン 6.9 以降である必要がある。
- サブスクリプションマニフェストを Satellite にインポートしておくこと。有効な Red Hat 証明書を持つ組織のホストのみが [Red Hat Hybrid Cloud Console](#) に接続できます。詳細は、Red Hat Satellite の [コンテンツ管理ガイド](#) の [Satellite Server へのサブスクリプションマニフェストのインポート](#) を参照すること。
- アクティベーションキーを使用して Satellite にホストを登録し、Red Hat サブスクリプションを割り当てておく。詳細は、Red Hat Satellite の [ホストの管理](#) ガイドの [ホストの登録](#) を参照すること。
- ホストでリモート実行を有効にして、Satellite が修復 Playbook をホストで実行できるようにすること。詳細は、Red Hat Satellite の [ホストの管理](#) ガイドの [リモート実行のための SSH 鍵の配布](#) を参照すること。
- **設定 > インベントリ** の **アップロード** ページで **自動アップロードを有効にする** がオンになっていることを確認する。
- **Configure > Insights** ページで **Sync automatically** がオンになっていることを確認する。



## 注記

この手順では、Satellite のホストリストページとホストの詳細ページの推奨タブにも推奨数が表示されます。

### 2.2.1. Satellite から Insights へのホストインベントリのアップロード

以下の手順を使用して、ホストのインベントリを Red Hat Satellite から Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux にアップロードします。

#### 前提条件

- アクティベーションキーを使用して Satellite にホストを登録し、Red Hat サブスクリプションを割り当てておく。
- Satellite サービスへの root アクセス権がある。

#### 手順

1. Satellite Server で、Satellite Server のバージョンに基づいて、次のコマンドのいずれかを入力して、リモート実行プラグインを有効にします。
  - a. **On Satellite Server 6.12**

```
[root]# satellite-installer --foreman-proxy-plugin-remote-execution-script-install-key
```

## b. On Satellite Server 6.9 - 6.11

```
[root]# satellite-installer --foreman-proxy-plugin-remote-execution-ssh-install-key
```

2. Satellite Web UI で **Configure > Inventory Upload** に移動し、組織を選択します。
3. **Restart** をクリックして、ホストのインベントリーを Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux にアップロードします。  
ホストインベントリーをアップロードする各組織に対してこの手順を繰り返します。
4. **Auto upload** スイッチを **ON** の位置に切り替え、Satellite が1日1度ホストインベントリーを自動的にアップロードできるようにします。  
オプションで、**Obfuscate host names** スイッチを **ON** の位置に切り替えて、Satellite が Red Hat Hybrid Cloud Console に報告するホスト名を非表示にします。**Obfuscate host names** 設定は、rh\_cloud レポートにのみ影響します。ホスト名と IP を難読化する場合は、**insights-client** 設定で設定する必要があります。Satellite はこの設定を読み取る方法を把握しており、それに従います。

**Auto upload** および **Obfuscate host name** はグローバル設定です。これらは、すべての組織に属するホストに影響します。

## 検証

アップロードが成功したことを確認するには、[Red Hat Hybrid Cloud Console > Red Hat Enterprise Linux > Red Hat Insights > Inventory](#) にログインし、ホストの `satellite_id` タグを検索します。

必要に応じて、**Sync inventory status** ボタンを押して、タスクが完了するまで待ちます。クラウド側でも認識されたサテライトホストの量が表示されます。

## 2.2.2. Satellite が管理するホストへの Insights クライアントのインストール

Insights クライアントは、Red Hat Enterprise Linux のほとんどのバージョンにプリインストールされています。ただし、インストールする必要がある場合は、この手順を使用して各システムに Insights クライアントをインストールしてください。

### 前提条件

- ホストを Satellite に登録する  
すでに Red Hat Enterprise Linux ホストがある場合は、グローバル登録テンプレートを使用して Satellite に登録できます。詳細は、[Satellite へのホストの登録](#) を参照してください。

### 手順

1. Insights for Red Hat Enterprise Linux クライアントをインストールします。

```
# yum install insights-client
```

2. ホストを Insights for Red Hat Enterprise Linux に登録します。

```
# insights-client --register
```

3. 各ホストでこれらの手順を繰り返します。

または、**RedHatInsights.insights-client** Ansible ロールを使用して Insights クライアントをインストールし、ホストを登録することもできます。詳細は、**Managing Hosts**ガイドの [Using Red Hat Insights with Hosts in Satellite](#) を参照してください。

### 2.2.3. Satellite Server での Cloud Connector の設定

Satellite が管理するインフラストラクチャーで修復 Playbook をリモートで実行する前に、Satellite Server に Cloud Connector をインストールして設定する必要があります。以下のタスクを実行して、Cloud Connector の設定をインストール、設定、および確認します。

#### 2.2.3.1. Cloud Connector 設定 Playbook の作成

Satellite 管理者は、**Configure Cloud Connector** ボタンを有効にすることで、Cloud Connector をインストールして設定できます。これで、Cloud Connector が使用するサービスユーザーが作成され、Satellite での修復ジョブがトリガーされるようになり、このサービスユーザーの認証情報を使用して Cloud Connector のインストール Playbook を実行します。

#### 2.2.3.2. Satellite で Cloud Connector 操作を有効にする

Cloud Connector が動作することを確認するには、**Automatic Inventory Upload** (設定 > インベントリへのアップロード) と **Sync Automatically** (Configure > Insights) が **ON** になっていることを確認します。

Satellite から修復を実行する方法の詳細については、**Red Hat Satellite 6.12 のホストの管理のホストの Insights プランの作成** セクションを参照してください。

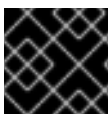
#### 2.2.3.3. Satellite と Insights の通信の確認

システム機能を確認するには、これらのタスクを手動で実行する必要があります。以下の手順を参照してください。

- **レポートのアップロード:** インベントリページから必要な組織を選択し、**再起動** をクリックします。この手順は非同期で、クラウドによる処理に時間がかかる場合があります。
- **By syncing Insights information:** Insights ページから 3 つの点メニューを選択し、**Sync Recommendations** をクリックします。
- **必要に応じて、新しいソースレコードのステータスを確認します。** ソースレコードは、Red Hat Hybrid Cloud Console > Settings > Sources の下にある **Satellite <UUID> organization <org\_name>** のようになります。修復を実行できるようになる前に、ソースが使用可能と表示されている必要があります。

#### 2.2.3.4. 自動同期を有効にして最初の手動同期を実行する

**Sync Inventory Status** をクリックし、組織の **自動同期** を有効にします。



#### 重要

初めて開始する前に、必ず手動で同期してください。

インベントリの同期中に、切断された状態のホストや、Hybrid Cloud Console インベントリにアップロードされていないホストの数を示す通知が表示されるのは正常です。この段階で、インベントリを再同期する必要があります。場合によっては、Hybrid Cloud Console でのホスト処理の修正に時間がかかることがあります。

### 2.2.3.5. ホストでの直接修復の無効化

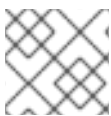
デフォルトでは、パラメーターは各ホストに設定されていません。これは、Cloud Connector でデフォルトで Playbook を実行できるように、**ホストグループ** が **True** に設定されています。その特定の組織に存在するすべてのホストは、同じパラメーターを継承することに注意してください。

Satellite が Cloud Connector から修復 Playbook の実行リクエストを受信すると、そのリクエストには、それを実行する必要があるホストのリストが含まれます。

Playbook の実行が単一ホストのクラウドから呼び出されないようにするには、そのホストで **enable\_cloud\_remediations** パラメーターを **False** に設定します。

### 2.2.3.6. ホストグループでの直接修復の無効化

デフォルトでは、パラメーターは **システム** に設定されていません。これは、Cloud Connector でデフォルトで Playbook を実行できるように、**ホストグループ** が **True** に設定されています。



#### 注記

その特定の組織に存在するすべてのホストは、同じパラメーターを継承します。

必要に応じて、組織管理者は、**enable\_cloud\_remediations** パラメーターの値を **False** に設定すると、組織またはホストグループ全体のクラウド修復を無効にできます。

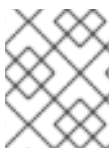
### 2.2.3.7. インベントリーのアップロードの設定

1. Satellite Web UI で **Configure > Inventory Upload** に移動します。
2. **Configure Cloud Connector** ボタンをクリックします。

### 2.2.3.8. 正常な設定の確認

Playbook が成功したことを確認するには、[Red Hat Hybrid Cloud Console > Settings > Sources](#) にログインし、Satellite Server を検索します。

## 2.2.4. Satellite Server 6.10 を 6.11 にアップグレードした後の Cloud Connector の設定



#### 注記

これは、Satellite バージョン 6.10 から 6.11 へのアップグレードにのみ適用されます。詳細は、[Red Hat Satellite のアップグレードおよび更新](#) ガイドを参照してください。

Satellite Server をアップグレードした後に Cloud Connector を設定するには、**Configure > RH Cloud - Inventory Upload** から **Configure Cloud Connector** ボタンをクリックして、新しいバージョンの Satellite Server で有効にします。同時に、Satellite Server のアップグレード後に、Red Hat Hybrid Cloud Console で以前のソースを手動でクラウドから削除する必要があります。

Cloud Connector を設定すると、レセプタービットが削除され、RHC ビットがインストールされます。同時に、Cloud Connector は Satellite のすべての組織をソースに通知し、接続を受け取る準備が整います。

### 2.2.5. サテライトでの Insights 推奨事項の設定

Insights for Red Hat Enterprise Linux Synchronization を使用して、Satellite で管理されているホストに Insights の推奨事項を提供できます。以下の手順を使用して、Red Hat Satellite で Insights の同期を設定します。

## 手順

1. **Configure > Insights** に移動して、Insights for Red Hat Enterprise Linux の推奨事項を手動で同期します。次に、**more options** アイコン (  ) をクリックし、**Sync recommendations.** を選択します。
2. 必要に応じて、**Synchronize Automatically** を **ON** の位置に切り替えて、Satellite が Hybrid Cloud Console から 1 日 1 回自動的に Insights の推奨事項をダウンロードできるようにします。

Satellite で Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux Synchronization が設定されました。

Satellite Web UI で、**Hosts > All Hosts** の順に移動し、Satellite が管理する各ホストに関する Insights for Red Hat Enterprise Linux の推奨事項を表示します。

## 第3章 INSIGHTS での修復 PLAYBOOK の作成と管理

Playbook を作成するワークフローは、Insights for Red Hat Enterprise Linux の各サービスで似ています。一般に、システムまたはシステムのグループで1つまたは複数の問題を修正します。

Playbook は、1つの Insights サービスによって特定された問題に焦点を当てています。たとえば、脆弱性サービスを使用して作成された Playbook には、脆弱性サービス CVE の解決策のみが含まれ、アドバイザーサービスの推奨事項は含まれません。

解像度に互換性があるため、Playbook には同じ RHEL メジャー/マイナーバージョンのシステムも含める必要があります。

### 3.1. RHEL システムの CVE 脆弱性を修正する PLAYBOOK の作成

Red Hat Insights 脆弱性サービスで修復 Playbook を作成します。Playbook を作成するワークフローは、Insights for Red Hat Enterprise Linux の他のサービスと同様です。

#### 前提条件

- Red Hat Hybrid Cloud Console にログインしている。
- 修復 Playbook を作成するために、強化されたユーザーアクセス許可は必要ありません。

#### 手順

1. [Red Hat Enterprise Linux > Vulnerability > CVEs](#) ページに移動します。
2. 必要に応じてフィルターを設定し、CVE をクリックします。
3. 下にスクロールして、対象のシステムを表示します。
4. システム ID の左側にあるボックスをクリックして、修復 Playbook に含めるシステムを選択します。



#### 注記

対象のシステムのリストをフィルタリングすることで、同じ RHEL メジャー/マイナーバージョンのシステムを含めます。

5. **Remediate** ボタンをクリックします。
6. 修復を **既存** または **新規** の Playbook に追加するかどうかを選択し、以下のアクションを実行します。
  - a. **Add to existing playbook** をクリックし、ドロップダウンリストから必要な Playbook を選択します。または、
  - b. **Create new playbook** をクリックし、Playbook 名を追加します。
  - c. 次へをクリックします。
7. Playbook に含めるシステムを確認し、**Next** をクリックします。
8. 修復レビューの概要で情報を確認します。
  - a. デフォルトでは、**autoreboot** が有効になっています。**Turn off autoreboot** をクリックす

ると、このオプションを無効にできます。

- b. **Submit** をクリックします。

### 検証手順

1. [Red Hat Enterprise Linux > Red Hat Insights > Toolkit > Remediations](#) に移動します。
2. Playbook を検索します。Playbook が表示されます。

## 3.2. INSIGHTS FOR RED HAT ENTERPRISE LINUX での修復 PLAYBOOK の管理

組織の既存の修復 Playbook をダウンロード、アーカイブ、および削除できます。次の手順では、一般的な Playbook 管理タスクを実行する方法について説明します。

### 前提条件

- Red Hat Hybrid Cloud コンソールにログインしている必要があります。
- 既存の Playbook に関する情報を表示、編集、またはダウンロードするために、拡張されたアクセス権は必要ありません。

#### 3.2.1. 修復 Playbook のダウンロード

次の手順を使用して、Insights for Red Hat Enterprise Linux アプリケーションから修復 Playbook をダウンロードします。

### 手順

1. [Red Hat Enterprise Linux > Red Hat Insights > Toolkit > Remediations](#) に移動します。
2. 管理する Playbook を見つけて、Playbook の名前をクリックします。Playbook の詳細が表示されます。
3. **Playbook のダウンロード** ボタンをクリックして、Playbook YAML ファイルをローカルドライブにダウンロードします。

#### 3.2.2. 修復 Playbook のアーカイブ

不要になった修復 Playbook をアーカイブできますが、その詳細は保持したいと考えています。

### 手順


1. [Red Hat Enterprise Linux > Red Hat Insights > Toolkit > Remediations](#) に移動します。
2. アーカイブする Playbook を見つけます。
3. **More options** アイコン (  ) をクリックし、**Archive playbook** を選択します。Playbook はアーカイブされています。

#### 3.2.3. アーカイブされた修復 Playbook の表示



Insights for Red Hat Enterprise Linux で、アーカイブされた修復 Playbook を表示できます。

#### 手順

1. [Red Hat Enterprise Linux > Red Hat Insights > Toolkit > Remediations](#) に移動します。
2. Playbook のダウンロードボタンの右側にある **More options** アイコン (  ) をクリックし、Show archived playbooks を選択します。

### 3.2.4. 修復 Playbook の削除

不要になった Playbook を削除できます。

#### 手順

1. [Red Hat Enterprise Linux > Red Hat Insights > Toolkit > Remediations](#) に移動します。
2. 削除する Playbook の名前を見つけてクリックします。
3. Playbook の詳細ページで **More options** アイコン  をクリックして **Delete** を選択します。

### 3.2.5. Red Hat Insights for Red Hat Enterprise Linux を使用した修復ステータスの監視

Insights for Red Hat Enterprise Linux 修復サービスから実行する各 Playbook の修復ステータスを表示できます。ステータス情報は、最新のアクティビティの結果を示して、Playbook 実行の全アクティビティの概要を提供します。Playbook の実行についてのログ情報を表示することもできます。

#### 前提条件

- Red Hat Hybrid Cloud Console にログインしている。

#### 手順

1. [Red Hat Enterprise Linux > Red Hat Insights > Toolkit > Remediations](#) に移動します。このページには、修復 Playbook のリストが表示されます。
2. Playbook の名前をクリックします。
3. **Actions** タブで、**Status** 列の任意の項目をクリックして、解決のステータスを示すポップアップボックスを表示します。

Satellite Web UI で Playbook のステータスを監視するには、Red Hat Satellite の [ホストの管理](#) ガイドの [リモートジョブの監視](#) を参照してください。

## 第4章 修復 PLAYBOOK の実行

修復 Playbook を作成したら、組織の Ansible ワークフローを使用して Playbook をダウンロードして実行するか、Insights for Red Hat Enterprise Linux アプリケーションからリモートシステムで Playbook を実行できます。

### 4.1. INSIGHTS FOR RED HAT ENTERPRISE LINUX からの 修復 PLAYBOOK の実行

インフラストラクチャー内のシステムに rhc クライアントがインストールされている場合、Insights for Red Hat Enterprise Linux アプリケーションから直接、リモート RHEL システムで修復 Playbook を実行できます。

#### 前提条件

- Red Hat Hybrid Cloud コンソールにログインしている必要があります。
- **Remediations administrator** ロールを持つユーザーアクセスグループのメンバーである必要があります。

#### 手順

1. [Red Hat Enterprise Linux > Red Hat Insights > Toolkit > Remediations](#) に移動します。
2. 実行する修復 Playbook を選択し、Playbook 名をクリックします。
3. **Execute playbook** ボタンをクリックします。
4. ポップアップされたウィンドウで、**Execute playbook on systems** ボタンをクリックします。Playbook はそれらのシステムで実行されます。

## RED HAT ドキュメントへのフィードバック (英語のみ)

当社のドキュメントに関するご意見やご感想をお寄せください。フィードバックを提供するには、ドキュメントのテキストを強調表示し、コメントを追加してください。

### 前提条件

- Red Hat カスタマーポータルにログインしている。
- Red Hat カスタマーポータルで、**Multi-page HTML** 形式でドキュメントを表示している。

### 手順

フィードバックを提供するには、以下の手順を実施します。

1. ドキュメントの右上隅にある **Feedback** ボタンをクリックして、既存のフィードバックを確認します。



#### 注記

フィードバック機能は、**Multi-page HTML** 形式でのみ有効です。

2. フィードバックを提供するドキュメントのセクションを強調表示します。
3. ハイライトされたテキスト近くに表示される **Add Feedback** ポップアップをクリックします。ページの右側のフィードバックセクションにテキストボックスが表示されます。
4. テキストボックスにフィードバックを入力し、**Submit** をクリックします。ドキュメントに関する問題が作成されます。
5. 問題を表示するには、フィードバックビューで問題リンクをクリックします。